

# 女人国

——中国雲南省秘境瀘沽湖摩梭人母系大家族の実像——

劉学朝 編著／朱新建・王武雲 共訳<sup>1)</sup>

## 0 訳者の言葉

昨年1999年の末に、中国雲南省の昆明世界博覧会に行ってきた。博覧会はすでに大好評のうちに閉幕したそうだが、中国国内からの観光客は後を絶たないので、今年2000年の3月まで延長になったそうだ。昆明は「四季春の如く」とよく聞くので、薄いコート一枚で行ったから失敗だった。そのせいか、石林から昆明へ帰る途中の「一条龍」での焼きたての北京ダックと熱々の赤犬火鍋の遅い昼食は実に美味かった。

「摩梭人」(mosuoren、モーソー人、以下同)の居住する瀘沽湖まで足をのぼしたかったが、残念ながら日程の都合で行けなかった。しかし、博覧会は延長開催中であることもあって、ひととき目立つ納西族をはじめ、鮮やかな民族衣装を着ている少数民族の娘たちが至るところに目に付く。それは雲南省だけでも26の少数民族がいるからである。摩梭人は納西族の1族であるが、納西族よりもむしろ摩梭人としてよく知られている。とくに、摩梭人の社会は母系社会で、「走婚」(通い婚、以下同)という風習があることは近年国内外で知られるようになり、人々の興味がそそられているところである。今日交通の便がよくなったおかげで、中国国内からだけでなく、外国からも様々な人々が摩梭人の聖地へどっと殺到しているのである。観光客もいれば、研究調査の教師や学生もいるそうである。

雲南省の流通・地域振興に関する研究をされている日本福祉大学経済学部の森靖雄教授から劉学朝編著の『走進女人国』という本を紹介され、翻訳をすすめられた。読んでみたら著者が長く摩梭人と一緒に生活しており、観光客などに摩梭人の社会を正しく理解してもらうためにこの本を書かれたそうだ。訳者は摩梭人のことについてあまり詳しくないが、著者の気持ちを

十分理解して訳したつもりである。そして、読者に正しい角度から異文化理解に役立てていただければと願っている。

なお、訳文の方は都合でいくつかの見出しをつけなおし、数ヶ所構成を前後させたことをお断りしておく。

## 1 摩梭人の家族構成

### 序詞

丸太の平屋、炊煙ゆらゆらと、  
祖母はいろりの上座に陣取る。  
スーリーマ酒に、猪の脂身、  
通い婚の風習、世代継がれる。

コーム女神、もとは摩梭の娘、  
瀘沽湖の碧い湖水、神魚の涙。  
古い木の橋に、一面の青い葦、  
鴨の群れ、魚蝦の大群、仲良く戯れる。

雲南省西北部と四川省の境に位置する寧波県永寧郷は、古くて美しい瀘沽湖畔にあり、ここには純朴で善良、勤勉でおおらか、情熱で客好きの摩梭人が住んでいる。これは我が国で今でも母系社会の風習を保つ少数民族で、人類歴史の大河の中の燦爛たる夜光珠であり、人類社会を再現する生きた化石でもある。

私は1973年にこの女人国に来て以来、まるで神秘的夢幻に身を置いたようであった。1980年代に一度ここを離れたが、今日私はまたこの憧れの地に帰ってきた。読者の皆さんに短い時間の中で母系血縁を家族の絆としているこの世にも不思議な母系氏族の生きた化石の本当の姿を知ってもらうために、私は自分自身の見たものを書き記して、皆さんに捧げる。

家庭は人類が生存するための避難港である。摩梭人母系氏族家庭は女性が仕切る大家族であり、多い家族は2、30人（4、50人の家族もある）にも達しているが、社会の発展につれて次第に縮小しつつある。家族は祖母、母親（数人）、舅（数人）兄、姉、弟、妹からなっている。家族には父親がおらず、母親を中心に生活している。これが摩梭人の生活様式の特徴である。舅や兄、弟の子供はその母親のもとで生活している。この大家族は分家することなく、しっかりと自分の祖母や母親、舅についてそれぞれの仕事と責任を果たし、子孫のために、一家幸せの

ために勤勉に働いている。

家族の中では、祖母が最高の舵取で、母親が一家の生計や財産の管理を担当し、舅が冠婚葬祭を掌握する。家族の中では、就学者は学校に行き、働く者は仕事に行き、商売をするものは商いに行く。70%ないし80%の農作業と家事は姉と母親がすることになっている。

何人かの舅や兄、弟は、副業あるいは商いなどで得たすべての収入は全部祖母や母親に渡す。この母系の家族の中では祖母は母親と舅の手本である。したがって、いつまでも家族の生存のために考え、農作業のことや生活のこと、子供たちの就学のことなどを考えなければならないので、母親や舅および姉たちは非常に大変である。これが摩梭人母系家庭の基本的な構成図である。

丸太の平屋にいろいろのある間は摩梭人の居間である。そこに入ると、母系社会の生活の中心であることがわかるのはそんなに難しいことではなかろう。一日の生活はここから始まる。母親が一番早く起きる。毎朝5時半から6時頃に起き、いろいろの火をおこし、朝食の準備を始める。舅、兄弟、彼ら「夜の使者」と呼ばれる人たちはこの時間帯に帰ってくる。朝食は1980年以前はだいたい「お餅」、つまりとうもろこし、裸麦を煎った後、粉をひいて作ったものである。現在はだんだん小麦粉と米が代用されるようになった。母親はマントー（蒸しパンの一種＝訳注）を作り「酥油茶」（牛や羊の乳を煮沸して作ったミルクティー）を作る。まず、初めに「鍋柱石」（いろいろの上に立てた石製の柱、高さは60センチぐらい、直径は15から20センチで、神のシンボル）を敬う。この礼儀は家族だけではなく、客人もみな、守らなければならない。1日に3回食事をする前、まずこれに敬意を表すのと同時に、亡くなった祖先を偲ぶ意を表す。客人が持ってきた贈物も「鍋柱石」のところに置かれる。摩梭人は今日これらの食べ物を食べたら、明日、神様がもっといい物を持ってきて下さると信じている。

朝ご飯を食べた後、人々はそれぞれ自分の仕事をする。昼食、夕食は米が主食になる。肉類はだいたい豚肉を主に食べる（豚肉は豚を殺した後で内臓、骨を取り除き、塩漬けにした後、縫い合わせ作った物である）。豚肉はまるで一つの扁平な乾いた豚のようだ。各家庭には、このような豚肉が10個ぐらいはある。多いところで2、30個ぐらいある。牛肉と羊肉も主要な肉類である。その理由は居住地の海拔が高いので野菜を作ることができないため、野菜は食べられないからである。主食は肉類およびとうもろこし、米である。

よその土地から来た人は摩梭人の家族構成を理解しないと、彼らの幸せや苦しみなども理解することができない。実は彼らは自分の父親が誰かみな知っているが自分の父親と一緒に生活しない。しかし、彼らは家族が分裂している感じは全くない。これは現代社会の家庭において男女が離婚するという悲劇があるということは彼らにとって全く問題外である。これらの珍しい風習は現代人が想像もつかないものである。摩梭人は自由な「通い婚」をする。母親や子供

たちはみな後顧の憂いがなく、母系大家族は彼らの生存のための避難港であり、死ぬまで老人の世話をする敬老院である。こんないい家族のなかで男たちは祖母、母親、姉妹たちと一緒に暮らすことをもちろんよろこぶさ！ これこそこの「母系」家族はみな親切で幸せで明るく調和がとれている秘密である。

では、この「母系」家族の母親について述べよう。「母」という名詞は他の兄弟民族と同じく神聖で偉大である。しかし、この母系家族の中で母がもっとも偉大なのは、一家の生産、生活、経済、さらに礼に対して礼で返すといった礼儀作法の中心を握っていることである。1日でも数十年でも、死ぬまでずっと一家のために母親は止まず焦らずあくせく働くのである。

母親は家庭でもっとも苦勞し責任感があり、尊敬される人で氏族でも一番重要な人である。「母系」という氏族の家庭で「通い婚」が未だに存在しているのはその合理性と長所があるからだけでなく、母親が決定的な役割を果たしているからである。

次はこの家庭の中で数多い舅の話をしよう。舅は「母系」家庭で重要な一員である。「母系」家庭で生まれた子供たちは舅たちに育てられ、さまざまな儀礼や技能などを教わる。(舅は)母親と姉妹を助けて一緒に子供をそだてる。家でおきた出来事はみな母親、姉妹と舅で相談して決める。特に、甥たちに対する教育や家を建てることなど舅に責任があるので甥、姪にとっても尊敬される。男の子は大人になると舅につれられて、外で生業を学ぶ。舅は甥たちにいろいろなことを授ける。ここで気になることがある。舅の子供はどこにいるだろう。姉妹の子供は誰の子だろう。ちょっと待っておくれ！ これが母系家庭の人々が聞かれない問題であり、母系大家族の神秘的な所在である。客人は摩梭人の家に行き、子供たちに「彼は親父か?」「親父は家にいる?」とか聞かない方がいいだろう。間違えてはいけないのは、家にいる男性成人は皆舅である。答える人もいるかもしれない。みんなは自分の父親が誰か知っているが、よそのひとに教えたくないだけである。

舅という人物は「母系」家庭で甥と姪に尊敬される。しかし、他ではそれほどではない。しかし、卑下はしなくてもいい。科学が瀘沽湖の家々に盛んに入ってくるにつれて「男権制」は次第にこの母系家庭という最後の古い砦に攻撃をはじめた。特に1974年の「一夫一妻」という制度が実施してから、母系家庭はひどい打撃をうけた。今は80年代から今までの若い男の子たちは俺が一番えらいのだという考えを持っている。その主な原因は社会がますます発展して鎖国している地域は外の世界とくらべて、外の世界のほうがとても豊富多彩で男たちを誘惑している。そして、男たちは現在、交通の発達で自由に外にいたり社会活動に参加したり、新しい事物をみるチャンスが日増しに増えたからである。女性の方は、ずっと家庭の鍋柱を囲んでの生活をしており、学校で勉強する女子も少なく、大学にいく女子はさらにいない。女性たちは知らず知らずに自分の地位を失ってきている。もし母系氏族圏で男たちが更に自己主張して

いくと、この東方の女人国という生きている化石は風化し将来は歴史書にのみ登場することになるだろう。中国の開放政策前から現在まで耳で聞き、目で見える現実には男が「母系」家庭で、次第に重要な地位になる。私は政府と社会は法律で摩梭人の女性を保護して、摩梭人の女性のための小学校を建てるべきであると考えている。東方の「女人国」は3000年前に自分たちの社会を管理、運営することができたのに、現代人の私たちにはそれができないだろうか。このまま発展していくとその時、人間社会はこの生きている化石を失うことになるだろう。これは無駄な心配では決してない。社会全体を動員してこの生きている化石を保護するためにとりくむことが必要である。摩梭人女性は世界で一番勤勉であり善良な女性である。東方の「女人国」という国の舅たちは姉妹と協力しあって、しっかりとこの多彩な生活を大事にしていかなければならない。

## 2 摩梭人の風習

摩梭人の男は娶らないし、女は嫁がない「阿夏<sup>アシャ</sup>」という通い婚の風習ある。そして、「女尊男不卑」という風習もいまだに完全に守られている。客をもてなすことや葬式のやり方は雲南省の永寧から金沙江の地域まで、また四川省の互所、前所、木里などの村や群落との違いはあるが大抵似ているところが多い。例えば、死者の五官に牛や羊の乳から加工した食用油をぬって口に金、銀を供える。このような細かいことを本の中に一々書くことはできないが、古い儀礼は残っているものもあれば、中には失なわれたものもある。ここではいくつかの重要な事柄について説明しよう。

摩梭人には春節、祭祖節、端午節、少年節、転山節そして転海節といった祝日がある。

母系氏族の大家族の風習の特色は、舅が儀礼を管理して財を管理することは母親たちであることだ。家庭の葬祭や、商売に行くことなど対外の付き合いはおじさんたちがおこない、生産、生活は母あるいは他の威信があり管理のレベルも高い母親に管理される。したがって、男性は母系の家庭に深い役割と労働を受けて、高い地位を受けている。これによって摩梭人の家庭において男性と女性の（仕事の）分業がとても明確であることがわかる。女性が細かな生活形成をするおかげで彼らは日々暮らしている。彼らの住んでいる地域の生活水準と環境は隣の地域よりよい。

摩梭人は礼節を重んじる。これは礼儀にも現れる。現実の生活には女性の表現する儀式は男性より高い。目上の人に対して敬語を使ったり、仲間に対して謙譲語を使う。大家族で食事するとき、年長者が「食事はじめ」と言ってから年輩順で食べはじめる。あとは平等である。

## 2.1 通い婚

通い婚は「母系」家族の中で重要な仕組みの一つである。成人男性の通い婚は子孫を作る方法である。これは他の民族では夫婦が長年一緒に暮らしているのと違う。彼らは、夕方になるとやって来て、夜明けには別れていく。

摩梭人の通い婚の方式は2種類にわけられる。ひとつは、「阿注<sup>アズ</sup>」という定住婚で、もうひとつは「阿夏」という別居婚である。どのような方式を採っても「藏芭拉<sup>ザンバラ</sup>」という儀式を行わなければならない。それはかまどの神様と祖先を拝むことである。場所は女の家で時は普通夜中におこなう。来客を呼ばず、贈物もされず、友人たちも来ない。この儀式では男が立会人をつれて、すでに心の通じ合った彼女の家にやってくる。二人には愛情があるから、母と舅の命令や媒酌人などの存在は必要としない。もちろん、彼（彼女）の母親および舅たちの黙認があつてはじめてこの儀式を行う。男は自分の経済の状況によって贈物を持ってきて、儀式の通りにいろいろの平台と経堂の神棚に置く。それから、祖先やいろいろに礼拝し、祖母、母親、舅、姉などに報告する。そのあと、目上の兄弟姉妹の祝福を受ける。送った贈物は祖母とそれぞれの年齢に応じてひとつずつ贈られる。愛しい「阿夏」は必ず摩梭人の飾りにてらして、顔から足まで心をこめてきれいに着飾る。男は女がこころをこめて織った摩梭特産の麻布で編んだ摩梭の花模様の腰巻きをもらうことができる。女性は男性に対して金品や物品を贈ることはしない。彼女たちは「男と女の愛は平等であり、どんなものよりも大切である」と思っている。感情は摩梭人の「通い婚」の重要な要因である。立会人が「阿夏」の母親や舅たちに交際を申しのち、両家の関係が正当化する。「阿夏」の「通い婚」は客を呼ばず、祝宴をしない。この古い風習は簡素で素朴であり、1時間ほどで儀式全体が終了する。

次は「阿注」定住婚を紹介する。摩梭人の若い男女は「通い婚」という儀式をしたのち、男女の両方の家から引っ越しして一緒に生活する。または、男性が女性の家に住むことや女性が男性の家に住むということもあるが、後者はあまりない。二人は長年お互いに頼りあい、生活し子孫を育てる。このような定住婚を「阿注」定住婚という。

「阿夏」通い婚はこうである。夜がそっと訪れると、家の成人男性は外に出かける。家族のうち、舅、兄、弟などがそれぞれの目的地へ、すなわちおのおの各自の「阿夏」の家に向かう。相手の女性も家で「白馬の王子様」が到来するのを待っている心境である。女性は夜になるととても忙しい。家長の母にはもっとも重大な責任がのしかかる。舅や兄弟の出かけるのを準備したり家の中の年若い母親や兄弟子供たちを世話しなくてはいけない。それに自分の「阿注」を待っていないなければならない。

もうすこし注意深く観察すれば、摩梭人の母系の大家族の夜の生活には多くのルールがあるのに気付くことができる。外でドアを叩く男、あるいは来客には、年上の舅たちは決してドア

をあけない。また誰かと問うこともしない。女性もとりあわない。必ず外で声を出して呼んで、自分は客だと説明しなければ、祖母や子供はドアをあけてくれない。家の中で成年した姉妹が大勢いるので、逢いにくる「阿注」も多い。それぞれさまざまな合図と気持ちを伝える方法がある。もし、自分の「阿注」ではなければ、自分の部屋には入れない。娘の部屋のドアは合図があったら静かに開いてくれる。居間にいる年輩の女性と子供たちは皆知らん振りしている。

彼女たちのところでは第三者が存在しない。父母の命、媒酌の言など封建のルールもなければ、女は夫に従えというものない。男と女は各自の家に住んでいて、生活ではお互いに頼ることはない。男は世の中に至るところにいるし、女だって女人国にはいっぱいいるという感じである。性行為からいえば、女性が主導権を握っている。このような事情を知ってはじめて、人々は摩梭人は離婚や後家、孤児や相続権などの問題がなぜ存在しないかがわかるのである。彼らは独自の性の考え方や道德規準を有し、私たちと全然違う。彼らの氏族のなかで大多数の阿注と阿夏は尊敬しい、責任感がある。ただ、「夫婦」として他の民族のようにはっきりとは明記していないだけである。

一部の村落やあるいは宗教的家族構成および婚姻の現実の中で、次のような現象もある程度存在する。つまり、男は名実とも夫でもなければ、父親でもない。妻に対する責任や子供たちに対する養育の義務など瀟洒湖に捨てたように全部とつくにあとかたもなく忘れた。彼女のところは行きたい時は行って、帰りたい時はかえり、すっきりさっぱり。一旦彼女は彼に付き合いを拒絶し、あるいは男は浮気になると、昔の愛情は雲や霞が消えるようになってしまう。春夢だけ残っているのもなぞのひとつ。

ここでは性行為と経済は関連しない。男女の結合は自由で、別れるのもなんの障害もない。男女双方に主導権があり、社会も家庭も関与しない。もめごとがおきても双方の母親、舅はうまく処理する。生計を立てる結合ではなく、離別も誰かの生存を損なうこともない。たとえ経済条件がよいからって、良い結合の基礎になるのでもない。摩梭人の阿夏の通い婚は結局愛情が先導する。だから、摩梭人は成年後、感情が不合いになると、子供ができる前はよく阿夏、阿注を変えたりするが、子供ができれば、そう軽々と別れられない。夕方になると、若い女性が興奮した心情をおさえられず、多くの使者が夕来朝去。彼らの性の世界では私たちの想像するように、どの女子にも愛が語れて、どの男子にも愛を求められるとは限らない。彼らの求愛の方式は働く中で、勉強する中で、村を訪ね、友や親戚を訪問し、商売やその他の活動の中で互いに思いをよせ、ある程度愛情の基礎を立てたあとで、腕輪やネックレスやリングや腕時計などの思いの品を交換する。これは彼らと母親だけ知っている。彼らの気持ちの交流が深くなっていくにつれて、通い婚の回数も多くなっていく。恋仲の関係は安定して、一生の伴侶になる。もし、不誠実だったり、口だけ美辞麗句だったり、無能だったりのらくらして働かなければ、

日が経つと、きっとふられてしまう。「通い婚」という摩梭人の家族構成におけるこの事実は今日の人々は想像し難いことである。自由自在に「通い婚」ができる秘密は母親と子供たちには後顧の憂いがないからである。母系家庭は皆を守るところで、成長した男にとって、母系大家庭は彼らの生活や老後の楽園である。男たちにとってはこんなにいい居場所はほかにないだろう。これが「通い婚」の風習が今日まで続いている原因のひとつである。

摩梭人の少女少女は母系家庭で祖母、母親、姉たちがそだてる。彼らは子供のときから集団思想とお互いに尊重しあう美德を学び、「母系」の環境で大家族の意志と尊老愛幼の教育を受け、母と年長者に随い、礼節に気をくばり、悪事を全然しない。このような風習と道德の標準は子供たちに深い印象を残している。近年来、外界の影響を受けながらも、摩梭人の社会は安定している。私は統計したことがある。瀘沽湖のすべての自然村には、新しい中国成立から現在まで、一人だけ3年の懲役に問われた。この50年の間に、全行政府村の一千人ぐらいのなかに、軽犯罪を犯したのは一人だけである。重罪を犯した人はいない。だから、若い世代は小さいときから年長者からよい教育を受けていることは伺える。過去の人民公社、生産隊にしてもあるいは今の自営業にしても、摩梭人は今まで「共に働き、別に食す」という形式を保っている。こういう生産労働過程は若い男女がお互いに接しあう機会を与える。したがって、こうして愛情はこの土壌でうまれる。彼らはお互いに助け合い、純粹で、親切、心温かく、気前がいい。私たちはこのような美德に心をうたれて、うらやましいかぎりである。

少女少女は13歳になると、母系家庭は彼らのために「成丁礼」(成人式)を行う。女の子はスカートを穿き、男の子はズボンを穿く。この式典は摩梭人にとって一生の中で重要である。「成丁礼」は旧暦の新年の元日に行われる。雄鶏の朝一番の鳴き声を聞いたなら、母親は子供を起こして、顔をあらい、髪を整える。丸太の平屋のいろいろの火をもうもうと焚いて、舅たちは大きな豚のかたまりと一袋の食糧を運び出す。祖母、あるいは母親は新しいズボンとスカートを持ってくる。鍋の前で祈願して彼らに着せる。

女の子は13歳になるまで、ずっと二本のお下げを結う。13歳になると長い一本の三つ編みを頭の上に結う。以前は黒牛のしっぽの毛を使っていたが、今では黒い毛糸に変わった。黒い絹糸を使って大きな三つ編みを編んで頭に輪を巻く。大人の女性とおなじになる。母親は女の子を正房(今の居間)の真ん中のいろいろの右にたてている「女神柱」のそばに立たせる。彼女の古い服を脱がせ、金色の衿で黒のコール天あるいは赤のコール天の短い上着を着せて、白のあるいは空色のおりめのスカートを穿かせ、刺繍の赤い腰巻きを締める。大きい三つ編みに赤い花をつける。摩梭人の少女たちの穿いている白い折り目の長いスカートや服装、髪のかき方はなんとも美しい。

13歳の男の子は舅が古い服を脱がせてくれる。短かい上着を着て、広いズボンを穿いて、彩

色の腰巻きを締める。大人と同じになる。「成丁礼」を行う子供は必ず一方の足で豚を踏み、もう一方の足で食糧袋を踏む。将来、食べ物と着るものに困らないという意味である。母親、舅、兄、姉から祝福の言葉をいただく。舅にお辞儀をする。「銅柱」にもお辞儀する。それから、大人に案内され、親戚、友達をたずねてまわり、親戚と友達から祝いの言葉や贈物をもらう。最後に親戚と友達にご馳走する。村によっては「成丁礼」が違うところもあるが、大抵同じである。

こういう古い儀式は少年少女の成人教育の第一歩である。それからは彼らは人生の歩みを踏みだし、青春期に入り、正式に母系家庭の一員となる。女の子は母親から家計の管理を学ぶ。男の子は舅から知識、技能を学ぶ。こうしたことは全部直接的な経験の伝授であるが、「言葉で教え行動で範を示す」のである。

少女は13歳になってスカートを穿いたら、母親は「小鳥は巢から飛びだした。自分で飛ぶことを学びなさい。今後、小さい子供たちと一緒に遊んではいけないよ」と言うようになる。17、8歳になったら母親や祖母はもう丸太の平屋のいろりの側では寝させず、娘のために準備した二階の部屋に住ませる。そうなると、男の子はもう彼女たちから目をはなさず、毎日のように、人に託したり、いろいろな手で贈物をしてつきあいをもとめる。この民族は女が男のご機嫌をとることは全然しない。ほとんどは男から訪ねてくる。もし、娘があなたを好きならば、愛情の印を贈ったり、結婚の申し出をしよう。「通い婚」という儀式をおこない、隠語を約束して、夜逢いに行こう。すると、彼女は静かにドアを開けてくれる。長い付き合いができれば、一生の伴侶になれる。こうして、二人の関係は公にされ、堂々とすればよい。逢いにいくと居間のいろりのそばに通してもらえて、母親が鶏や羊、豚などの御馳走を食べさせてくれたり、舅は酒を注いでくれる。

子供が生まれてから3日たつと子供の体を洗う。これを「打三朝<sup>デーサンツォ</sup>」という。その日に舅は子供に名付けし、抱いて庭に散歩して、日に照す。1ヵ月後、子供の「阿日<sup>アジ</sup>」(父親の母、祖母)は肉を背負って羊を引いて、手に鶏、子供の生活用品などをさげて、さらに祖母、母親、舅への贈物を持って子供を見舞いにやってくる。

この氏族では「阿達<sup>アダ</sup>」(子供の父)は自分の子供の認知をするために儀式を行わなければならない。まず、祖先を祭り、それから、隣のお婆さんたちを食事に招待して土地の人々にこの赤ん坊が誰の子であるかを知らせる。しかし、子供をつれて帰ることはできない。子供は母系家庭の一員であって、父方の家庭は絶対にこの子供をつれて帰ることができない。たまに、男が女の家に住むことはある。しかし、長期にすむことはない。それに、そのような場合「夫」の地位は非常に低いものになる。彼はいつも必ず気をつけ、真面目に働き、いつでもどこでも自分の行動に気を付け、祖母から与えられた仕事をやらなければならない。丸太の平屋の居間のいろりのそばに、「娘婿」は胡座をして下座に座り、女主から食事を貰わなければならない。

もし「娘婿」としてうまくいかなかったらしょんぼりと自分の母親のところに戻らなければならない。これが「通い婚」の全てである。現在では社会の移り変わりで、政府の行政機関で働いている人や会社員、教師などしている人は一夫一婦制を行っている。農村においても一部あり、約30%占めている。中華人民共和国成立以来、いろいろな風俗習慣が変移してきた。

## 2.2 女尊男不卑

摩梭人は「母系」の血縁を重んじ「母親」は家庭をすべて支配している。むろん娘がいなければいけない。もし、姉妹たちに男ばかりが生まれると家の跡継ぎがなくなる。他の民族は男が生まれれば、跡継ぎができ、女が生まれれば親戚ができるというのが、摩梭人はこれとは反対に「女子は跡継ぎで、男の子は親戚になる」。これが「女人国」の特徴である。90年代の今日にも、このような奇怪な現象があるから不思議なものである。もし、母系家庭に娘がいなければ、従姉妹から養女としてくることがある。でも、決して舅や男兄弟の娘を跡継ぎにもらうことはない。つまり、舅、兄弟と血縁関係のある娘は家を継ぐことができない。

摩梭人の婚姻は科学的である。これは父系家庭と同じである。家族内での婚姻はない。他の家族と婚姻を結ぶ。男女は血縁関係があると「通い婚」はしない。近い親戚でも同じ名字で同じ家族であると婚姻を結ぶことはなにより嫌われる。摩梭人の「通い婚」は血縁関係を重んじる。母また父、どちらかの血縁関係があると「通い婚」はできない。だから、彼らの子孫は背がたく、丈夫で美形である。もし、他の民族で美形な男性と出会ったら、摩梭人の娘は喜んで彼と通い婚する。だから摩梭人のなかには、生まれつきの体の不自由な人がほとんどいない。これは「通い婚」が遺伝科学に適合していることの証明である。

## 2.3 客をもてなす

摩梭人の民族歌曲には「行かないで、友達になろう」という歌がある。もし、あなたが摩梭人の家を訪ねたら親切な招待をうけることができる。彼らはとうもろこしや裸麦や大麦と漢方薬を一緒に入れて自作した「酥里馬酒<sup>スーリーマ</sup>」という地酒を出してくれる。それは紹興酒のような香ばしい酒で、口当たりもよし、味もよい。ただ、お客として飲み過ぎてはいけない。酒が強い人は一升を飲んでも酔わないかもしれないが、酔っぱらうと2、3日目がさめない場合もあるそうである。飲まない人は無理しなくても大丈夫であるが、気持ちを表すためにどうしても一口は飲んだほうがよい。そうしないと無礼になる。出した料理は残すように少しずつ食べて、全部食べてはいけない。あなたは尊敬される客人なので、いろいろの上座の左側にすすめられるが、右側は女主人の宝座であるので、一線を越えてはいけない。「鍋柱」にも絶対触れてはいけない。あなたがもってきた贈物は「鍋柱」の平台に置く。これはあなたが彼らの祖先を尊敬す

る意味になる。あなたは必ずあぐらを組んで真直ぐ坐る。彼らは摩梭人の言葉で「ヘンバンアーミレン」（お越しくださりありがとう）と挨拶してくれる。あなたが真心であり、礼儀正しいならば、さらに一杯の香りの高い特製「酥油茶」（ミルクティー）がいただける。このお茶は牛や羊の乳から精製したものである。これは母系家庭が乳汁で育ったことを表している。したがって、あなたは必ず一口飲まなければいけない。全部飲まなくても良いが、自分で捨ててはいけない。

## 2.4 葬 式

人は生まれれば必ず死ぬ。摩梭人の習慣によれば人が死ぬとまず第一に爆竹をならしてまわりの人に知らせて人を差し向け、遠方の親戚や友人に手伝いにくるようがいい、ラマ僧を招いて死者の靈魂を苦界から救い、人の世に生まれ変わるようにお経をあげて、哀悼の意をあらわす。彼らは現世の幸せは前世の善行の積み重ねでことさら大切にしなければならないと思っている。生きている間にたくさん良い行いをすれば、死後、再びこの世に転生したとき、より幸せな生活を送ることができる。もし、よい行いをしなければ来世は苦しみに満ちていると考える。だから、摩梭人の中に悪行を働く者は少ない。人が死ぬと体を清め遺体をいろいろの側の腰掛けに安座させ座らせる。男性の遺体には9杯、女性の遺体には7杯の松柏香湯で体を清める。彼らは人が生まれるとき、母親に体を清められてきれいな体でこの世に生まれてきて、死んだ後もきれいな体でこの世から葬る。このように靈魂は再びこの世に転生することができると思っている。そして棺桶にはいる、遺体をひざまずかせて、合掌させて、指先と鼻先をつける。麻の布か白い布で包んだ後、麻の布袋か白い布袋に入れる。彼らは人が母親の腹の中にいるとき、このような格好で座っているので、死んだ後もこうするべきだと思っている。

遠方の親戚や友人が弔問に来るまで遺体をよく保存しておくため、居間の向かいの小さな部屋の土間に穴をほり、底に大きな石を3つ置いて、遺体をその上に座らせ、穴の上に鉄の鍋をおいてふたをし、さらに泥水で封じて空気を遮断し、腐敗を防ぐ。外側には祭壇を設け、明かりをともし、いろいろな食べ物を供え、一日に3度とりかえる。風習と宗教儀式によれば、靈魂を濟度するのに、何週間にも及ぶことがある。親戚の弔問が終わると、ラマ僧は、日を選び、新しい木の駕籠を用意する。木の駕籠には赤、緑、青色をした瓶と蓮の花を描き、さらに他の図案も描く。チベット文字で対句を書くものもある。駕籠の上に「人」の形の屋根を乗せ、かわらを書き、木の小屋のようにして、最後に遺体をその中に入れる。弔問の間、村人全員で手伝い、みな悲しみにひたる。弔問に訪れる者は贈物を携える。贈物は多くも少なくもなく、高くても安くてもかまわず、真意が表されていればよい。決して手ぶらで行ってはいけない。この時、いくつかのグループの女性が居間へやってくる。竹のかごを背負い「酥里馬酒」の缶を

抱え、米がたくさんはいった袋を担いでいる女性がいれば、楕円の油小箱をもってくる女性もいる。彼女たちは、ある者は同じ村から来た者で、またある者は隣村から、四川左所地区から来た者である。漢民族、普米族、白族、納西族など、各家族はみな家長が代表して弔問に訪れる。

弔問客が全員来たあとで、ラマ僧が日を選び、火葬の準備をする。火葬の前日、遺族専用の火葬場に手伝いに来ている若者は青松の木を1メートルの長さに切り、使者が生前住んでいた丸太の家の階数と同じものを組む。そしてラマ僧が指定した場所に黒い土、黄色い土、甕の灰を置いて水を注いで打つ。ラマ僧は灰色の袋から白い粉の付いた麻の糸を取り出してから指定の火葬場に彼らにだけ解る図案を描く。火葬場を飾り終えたら、ラマ僧は紙と筆で図案を書き、油灯をひとつとって、図案と一緒に火葬場の中心に置く。そして、木の小屋を組み立てて、中には青松の木に乾燥した木を交叉して置いて翌日の火葬を待つ。

一つ説明を加える必要がある。それは、あらゆる死者がこのような待遇を享受できるわけではないということだ。母方の大家族で老いて死んだ者、病死した老人だけがこのような待遇を享受する資格を有する。もし、外で自殺、他殺、支障、交通事故などで死んだ者は、死んだところですぐに火葬しなければならず、式も簡素である。

遺体は必ず太陽が昇る前に火葬しなくてはいけない。次の朝5時ごろ、砲の音が3回して、ラマ僧が経を朗読してからテントを取り払って、土を掘り出して、布の袋を持ち出して、遺体を木のかごに乗せて、庭に担ぐ。7時ぐらいで準備がすむ（雲南省の山中、朝7時はまだ未明である＝訳注）。貝殻の音がして、悲しい泣声が聞こえ、人の気持ちを揺るがす。一人が松明をつけて、四人の若者が木のかごをかついで、もう一人が死者の靈魂の乗っているろばあるいは馬を引いて、一人が太鼓をたたきながらチベット文字を書いた旗を持っている。他の大勢の若者たちが青松を持ってその後について行く。これで葬式が始まる。他の人の見送りは村の境までである。

火葬場に着いたらまた3つの砲を鳴らす。若者たちは遺体の入っている木のかごと死者の遺留品を井形の木の小屋の上におく。ラマ僧が祭文を読む。造詣が深い年上のラマ僧は黄色の服を着て高台に座禅を組み経を読む。もう一人のラマ僧はその井形の木の小屋に火をつける。すると火とともに死者は天国に昇っていく。火葬の儀式はこのように終わる。

その日に死者の家族は布の袋で遺骨を拾って帰る。庭の神像の前に台を起き、弔った後、遺骨を布の袋に入れる。死者が男性なら、雌鳥で儀式をおこない、女性なら雄鳥で儀式をおこなう。それから、遺骨を埋葬する山に登り埋葬し、鶏を放す。この鶏を「放生鶏」という。

この20年あまりのあいだ、私は葬式に何回も参加した。永寧や四川省の左所のあたりや瀘沽湖湖畔などの風習はほぼ同じである。金沙江畔・寧浪県に住んだ摩梭人の葬式も同じである。地区の関係によって細部がちょっと違う。

人類には自己の遺体を処置する方法がいろいろとある。私は様々な民族の葬式に出席したが、摩梭人は遺体を処置する方法にもっとも特色が見える。どの民族も自分の道徳と生活の風習がある。一番重要なのはどんな視野と角度から、ここの民族のよい伝統と優れた歴史文化を扱ってその精神を吸収し、後代を教育し、我が民族の勢いをもっとさかんにできるかである。したがって一つの問題について、見方はさまざまではあるが、このような「母系」大家族の「通い婚」の風習が数千年のあいだ続けられ、いろいろな社会制度を経て今まで完全によく保存されているのはまことにめずらしい現象である。

### 3 瀘沽湖の伝説

これは古い伝説である。伝説によると、落水（今の「瀘沽湖」）というところは元々、馬のひづめの形をしたきれいな草の茂る大きな堰で、広さは約60平方キロメートルぐらいはある。

一本の川は獅子山（当地の摩梭人には「カム女神山」といわれた）の麓の小落水村の東へ1キロのところ（今の四川省、左所大口地区に属する）を源に北から南に流れている。現在の雲南省の境に属する三家村にいたって、他の川と合流して東の方に流れる。この川の両側に勤勉、寛大、善良、熱心な「泥月鳥」（今の摩梭人）の祖先が住んでいた。摩梭人は放牧と狩りを主にして生活していた。堰の周りの大きい山の奥は密林であり、虎豹黒熊がいつも出没し、野生の山羊や鹿やうさぎなどが群がり、河川兩岸の堤防には牛や羊が生息していた。雁や鴨が空を飛びまわり、夏になると至るところに鮮やかな花が咲いていて蝶が舞っている。夜になるとかがり火の側、人たちは笛を吹いたり恋歌を歌ったりお酒を飲んだり、そしてうきうきさせる踊りを踊ったりして、たいへん幸福でいた。

ある日、一匹の悪竜が空を飛んで通りかかった。雲を押して下を見ると草原に牛や羊があまたにいる。人が馬に乗り、弓で動物たちを追いかける。嬉しそうである。悪竜はねたみ、悪知恵がうかび、その晩将兵を派遣して、永寧堰と落水堰の二つの堰を止めさせて、水が流れないようにした。そうすれば、あふれた水はすべての生き物を滅ぼすことができる。

摩梭人の菩薩「背尊独馬」はその陰謀を知って、手の中の浄瓶の水をまぎ、永寧河の水は東北の方に流され、「左錠」というところで大きな落水洞になった。水はこの穴から里塘河という川に注ぐ。昼になると人々は災難から逃げた。「背尊独馬」はまた、腹心の管花仙子の格姆女神を派遣してその2つの堰を見守らせ、その土地の安全を保護させた。もともと格姆女神は永寧堰の増坂村にくらす勤勉で善良できれいで器用な娘であった。ある日、悪山神の一人は彼女を自分のものにしたくて、強い風を作って、彼女を空に吹き上げた。永寧の人々は吃驚して、彼女を好きな男たちはとても悲しんでいた。菩薩「背尊独馬」がこれを知って指一本空を指して

格姆を救った。以前この格姆女神は大勢の人間の男の人と「通い婚」したことがあり、また菩薩のところで東岳泰山の王子とも「通い婚」していた。罰として菩薩「背尊独馬」は彼女に永寧堰と落水堰を見守らせることにした。彼女がそこに着くと、菩薩「背尊独馬」は彼女の体に一口の仙気を吹いて、彼女はすぐに一頭の巨大なライオンに変身してしまった。それから彼女は800年間その二つの堰を見守っていた。彼女は最初寂しくて悲しかった。しばらくして近くの山神たちが彼女を訪れて一緒に遊んでいた。彼らはみな背が高くハンサムで、彼女も美しく、だんだん「通い婚」し始めた。これらのことを悪龍神の家来たちが悪龍神に知らせると、彼は報復のわなを思い付いた。

悪龍神は穿地神の土行孫を買収し、玉皇大帝の愚才の三男花花太歳に相談に来てもらった。彼に西岳華山神に仮装させ毎日格姆女神に逢いに行かせることにした。また土行孫に「水落河」（摩梭人が「沖天河」と呼んでいる）に穴を打って水を流すように頼んだ。土行孫は方位を間違ったので穴を永寧堰の下に通してしまった。穴が出来上がりそうなある日、土行孫は穴がちょうどライオンの乳の下にあることに気がついて、彼は思わず悪戯をした。その時「背尊独馬」がたまたま坐禅していたのでびっくりして、将兵たちに土行孫と花花太歳をすぐに捕まえるように命令した。格姆女神は仕事をなおざりにしたというので将兵たちにひどく鞭打たれた（今「格姆女神山」の上にあるたくさん溝がその鞭跡と言われている）。山神たちは自分にも責任があると言いながらも、玉皇大帝と「背尊独馬」のやり方は無情だと批判した。女神の鞭跡を見て、みな悲しくて終に髪の毛が白くなってしまった。これがいまの山々の山頂にある白雪の由来である。

「山河は変えられるが、人間の本性は容易に変わらない」という諺があるように格姆女神はしばらくしてまた山神たちと密会し始めた。これを知った悪龍神は喜んで、今度こそいいチャンスだと思って、必ず陰謀を成功させようと決心した。彼はまず四番目の悪龍に妖術で大石魚を一匹の大きくて肉づきがよい生魚に変えてもらった。また大石魚に自分の指示通りにしないとすべての魚を殺してしまうことにすると脅かした。ある日「泥月鳥」族の子供たちが大石魚のそばで放牧していた時、その大石魚が突然一匹の大きな魚に変身して、そこで一人のひとが魚の肉を焼いて食べているのを見た（その人は実際には四番目の悪龍である）。いい匂いに子供たちが近づいて聞いてみると、悪龍はこの魚の肉はその大きな魚からとったと教えた。すると、一人の年上の子供が腰刀を出して、その生魚の体から一つ大きな肉を切りとって、焼いてみな一緒に食べてみるとすごくおいしかった。それから彼等は毎日食べにくるようになって、昼御飯も要らなくなった。ある日、子供たちの「阿米」（即ち母）は子供たちが昼飯の弁当を持たず、夕飯も食べたくない様子に気づき、「惹米孺」（「惹」は男の子、「孺」は女の子）になぜご飯を食べないかと問いただした。すると、子供たちは毎日大石魚の肉を食べていると教えた。

母たちは不思議に思い、皆で大石魚を見に行った。そこには本当に一匹の大きな魚がいた。驚いたことには肉が取られたところにまた新しい肉が生まれた。これを見た母たちは子供にこの神魚の肉を取らないようにさせ、そのそばで線香をたてて神を祀った（そこは今でも線香が絶えない）。その時格姆女神は山神たちとの恋に落ち込んで、自分の責任をすっかり忘れていた。旧暦の7月7日に玉皇大帝が宴会を開き、菩薩たちを招待することになって、「背尊独馬」は司会を務めているのでしばらく人間のことで手を分けることができない状態になった。

旧暦の7月15日は鬼のまつりで悪鬼たちが集まって夕食を食べることになっている。そこで四番目の悪龍がこういった。「兄弟、我々の食べ物はもうすぐなくなるので、今日これについて皆いいアイデアを提案してほしい。乾杯！」すると一人の悪鬼が言った。「私に言わせて。ここ何回かの教訓から見ると、我々の行動を毎回玉皇大帝や「背尊独馬」や天神たちは邪魔していた。今度人間たちにお互い戦わせて我々は漁夫の利をとる。それは食べきれないほどの牛や羊や人間の肉をもたらすわけ。方法についてはね、こう、こう……」

四番目の悪龍と悪鬼たちからそそのかされて、悪い人と貧欲な人たちはその大石魚を自分の家に運んで帰ろうとしていた。彼らは18頭の大きい牛をつれてきて道具を装着させ、粗いひもで大魚と牛をつないで引っぱり出そうとした。そして大太刀で魚の体を乱暴にたたき切って、とうとう大石魚を穴から引き出した。一瞬に洪水も一緒に噴出した。大石魚は痛みに耐えて、「背尊独馬」の教えた落水洞を通して水を里塘河へ引いていこうと努力した。しかし、けががあまり酷いので、里塘河の乱石灘で死んでしまった。堰の周りは水いっぱいになった。落水（現名は“瀘沽湖”）はこのような形成されたのである（毎年6月から7月にかけて冲天河および永寧河に洪水が起こる時、落水洞からも洪水が出ている）。

洪水がきた時、阿米たちは夕御飯を作っている人もいれば、豚、牛、馬にえさをやっている人もいた。男たちは一日中馬に乗って狩りにでていたのでとても疲れていた。彼らは牛乳や酥油茶や酥里馬酒を飲んで酔った人もいた。洪水が起こりほとんどの人が知るよしもなく死んでしまった。少数の財をなす輩は、金銀・真宝石を持って高地に向かって走り、結局洪水に飲み込まれて死んでしまった。女たちは子供をかばい、豚に餌をやる槽桶に入れて餌をまぜる木の板をオールにして、川岸へ漕いでいった。川岸に辿り着いたら彼女たちはたき火をおこし、水中にいる家族のものたちに「私たちは助かった、ここに草も柴もある。みんな早く来なさい。火のあるところに来なさい」と叫んだ。しかし、暴風と巨大な波がしきりに水中の人を溺れさせ、ほとんどの男は波に飲まれていった。その中で勇ましい男の人たちは悪龍、悪鬼と戦いながら、火のあるところに向って進み、ついに女たちに助けられた。このように摩梭人のいろりはいまでも一年365日火を絶やさないのである。

翌日、広々と広がる水中に大きな黒い点が現れる。そのなかに小さな黒い点があり、女たち

は前日と同じように猪槽桶を使って注意深くそれに向かって漕いでいった。見ると部落が友人たちを迎えるために臨時に作った丸太の家であった。この家は大きい柱2本で小さな木材を支えて、無事に水面を漂っている。左側に座っている人はみな、遠いところから来た男のお客と水中から助けられた男たちで、右側に座っているのは水中から助けられた女たちであった。皆力をあわせてこの丸太の家を岸にあげて、全員助けられた。このことから摩梭人はいまでも家をたてる時、土司でも百姓でも、金持ちでも貧乏人でも必ずこの丸太の平屋を作り、2本の神柱は欠かせないものになっている。

旧暦7月25日、「背尊独馬」はこのことを知り、調べに来た。草原と牛羊がいないことを見て、将兵たちに格姆女神をつれてくるように指示した。経緯を聞いた後玉皇大帝が「殺せ」と命令した。しかし、山神たちは女神が好きで、玉帝の判決に対して不服があったので、玉帝は「女神の右目をとり、湖に捨てて、天界から追放せよ」といいつけた。だから現在でも格姆女神山の側面は見えない。こうなると女神は永遠に永寧堰と落水を守るしかない。右目は「黒瓦俄島」となり、体は獅子山になって、頭の右側に大きな穴がある（今の格姆女神山）。男の山神たちは愛している恋人の目が掘り出されたのを見ると思わず泣いて、その涙が金沙江、怒江、瀾滄江になった。

このような血の教訓から女神は日々自分の職に尽し、白馬に乗って、矢を背負って永寧堰、落水湖の人民、家畜の安楽に加護し、「泥月鳥」族が無事で生活できるようになったのである。それからは摩梭人は豊かな家庭を築き、家畜にも恵まれ、穀物も豊作になった。そして男の山神たちは夜に来て、朝帰る出逢いの方法をとり、恋人と神秘的な「通い婚」という関係をもつようになる。これこそ摩梭人の女性が嫁に行かない理由である。

年月の移り変わりで、毎年旧暦の7月25日に摩梭人の「母系」民族は女神の寂しさをはらうために、みんなで彼女のふもとにいき、彼女の加護を感謝しに行く。その日になると、山野至るところに阿夏と阿注たちは「アーハーバーラ」という豪快な歌声の中に愛のメッセージをおくり、金笛の音で彼らを集め、晴れやかな摩梭鍋庄舞を踊る。

みなさん、この日を覚えておこう。「女神山」の麓に来て咲き乱れている花や蝶をみたり、奇妙な色彩に富んでいる山水を鑑賞したり、そしてこの独特の摩梭人母系家庭を訪ねてみよう。客好きな摩梭人、この美しいところ、奇妙な伝説などできっとあなたに人類の美しい未来をみせることになるに違いない。

瀘沽湖はいつも遠方よりの客人の到来をこころから待っている。

## 4 末代王妃の自伝

私は次尔直瑪といい（漢語名は肖淑明という）、1921年に成都で生まれて、12歳のとき成都をはなれて、四川省の雅安県に住んでいた。家族は父、母、兄、姉の6人からなっている。私は三女であった。子供の時から家族の中で兄弟姉妹に囲まれて幸せに過ごした。

民国32年（1943年）私は四川省の雅安女子中学校で教育を受けた。当時は、抗日戦争の時に国民は積極的に抗日活動に参加していた。我々は先生の授業に出るほか、街頭で講演したり、民衆に歌を教えたりしていた。歌は「松花江上」や「義勇軍進行曲」や「在太行山上」や「黄水謡」などがあつた。そして、「松花江は我が故里、黄河は中華人民の母の河、今は日本侵略軍に蹂躪されている。抗戦せよ！ ゲリラ戦にゆけ！ 中華人民団結して日本の侵略軍を中国から追い出そう！ 東北三省返せ！ 華北平野返せ！ 中華人民は危機一髪だ！ 銃を手になせよ！」などと民衆に呼び掛けたりした。先生について私たちはよく街頭講演や募金をした。親から貰った小遣いもよく寄付していた。私は学校で成績が一番だった。これらはみんな親の教育であった。親の指導で字を書いたり、本を読んだり、琴をひいたり歌を歌ったりしていた。先生と親の教育の中で花のように育てられた。親と一緒に過ごした16年は人間の道理がわかり、これは後に摩梭人の土司知府の「王妃」になって、摩梭人の大家族のなかで先輩たちや使用人たち、百姓たちと仲良く生活できたのも心から親と先生のおかげだと感謝していた。しかし、歴史は変化し社会環境は変わり、彼らに恩返しができただろうか？ できなかった。ただ、懐かしさと涙が残ったのみである。

### 4.1 末代族長に嫁ぐ少将の娘

1943年、旧暦12月、四川省の塩源瀘沽湖左所摩梭人「土知府」土司喇宝臣は雅安へ、当時の西康省主席24軍軍長劉文輝に会いにいき、彼は摩梭人の生活、生産、生育ならびに教育発展などを報告した。そして、山貨や毛皮などを持ってきて、劉文輝主席から銃器と弾薬を貰った。それから教養があり、「土知府」の印と公文書を管理し、書簡を処理できかつ内地の漢人と交流でき、摩梭人を教育指導できて、更に良妻賢母になれる才女を妻に迎えたいと申し出た。当時、私は雅安女子中学校で学んでいた。父は24軍軍需処処長で階級は少将であった。そして劉文輝の腹心の将軍であった。父は劉文輝と一緒に何年もの苦しい軍隊生活を一緒に過ごしてきた。したがって、我が家は劉軍長の常連客であり、劉軍長もうちの常連客であった。私はよく二人がこそこそ話すのを聞いたが、私が居る前では話さなかった。そしてなにか聞いたかと私にきいた。私が小学校時代、中学校時代に平型関会戦の話をよく聞いた。そして、四川子弟兵の台兒庄血戦の勇敢な抗戦の話も聞いた。中学校の時、共産党や周恩来、八路軍についても聞いた。

これらは当時の西康省の新聞にもあった。後に、同級生のなかには共産党に入ったり共和国の仕事をしたり、定年して幸せな晩年を暮らしたりするものもいれば、中華人民の解放事業のために尊い命を捧げたり、台湾に行ったりした者もいた。

私は中学時代各教科トップでいつも学校から奨励をいただいていた。銀製のものであった。また、徳、智、体などにも優れていた。筆も得意でよく学校で壁新聞を作り、スピーチコンテストに参加したこともあった。ちょうど年頃であり、私は学校で一番美しい女学生といわれていた。最後は結局、「昔から美人薄命」といわれているとおりであった。

なぜかよく解らないが、劉文輝と親に勝手に決められ、1943年旧暦の12月28日に私は先生とクラスメートと別れ、当時雅安にある「鴨綠江」の料理屋で摩梭人の土司（首領）をしている喇宝臣と結婚式を行った。仲人は当時、西康省の保安司令をしていた方駿修という人だ。知らないうちに摩梭人の嫁になった。その時、喇宝臣は36歳だった。3日後、私たちは親、故郷に別れ、雅安を出た。劉文輝はマシンガン2丁、他に長銃や短銃、弾薬などを与え、32頭のラバで運んだ。喇宝臣は劉文輝に川康边防保安総指揮を委任された。私たちは瀘定橋をわたり、大晦日の年越しも瀘定橋の南で過ごした。また康定城へ弾薬を受け取りに行き、やっと木里という町についた。木里に着いてから、木里の活仏に参拝した。私たちは擺児寨に住んでいて、山を越え、峰を越えてやっと永寧温泉についた。瀘沽湖湖辺左所の「土知府」の役所まで、全部で1ヵ月かかった。

目的地についたのは旧暦で2月であった。私たちは「格母山」の麓の前所から左所の山間に来た。瀘沽湖を見るとまるで夢のような景色にうっとりさせられた。北にある4つの小島に私はすごく驚いた。4つの夜光珠が湖に映って水中の森になったようだ。あの独特な猪槽船で静かに湖にさざ波が立って、水中に群になっている魚が楽しそうに泳いでいた。鴨と水鳥が湖面で戯れている。摩梭人の猪槽船に細い鱗した魚がいっぱい入っていた。生まれて初めて、こんなにいっぱいの魚、鳥を見たので、すごく興奮して湖の周りを歩いて回った。それから、瀘沽湖の岸で長い間遊んでから、木垮一帯から鴨と雁を見た。各種の鳥があちらこちらにいて、まさに鳥の天国だと思った。海門橋の草海の葦は2、3メートルの高さがあり、その中で鴨などいろいろな鳥がずっと鳴いていた。ここは野鳥たちの生息地であった。鳥の鳴き声で眠れなかった。草海には魚、エビ、菱の実が数えきれないほどあった。周りの山々には黒熊、野鹿、山羊が群れをなしている。摩梭人の鴨の狩り方は独特である。彼らは木の棒を使って山間を飛んでいる鴨を撃ち、あるいは地面に長い棒を横にして、一方を固定する、これは地面から約2、30センチの高さのところにもう一方をしっかりとめておく。そして、棒の殺傷範囲内にとうもろこしや籾をえさに、鴨の群れが着地し、集まってきたのをねらって棒を放ち打ち、飛び出した木の棒で鴨を狩る。

大渡河から温泉までみな谷間と原始の森の道だけだったが、瀘沽湖に着くとその景色で途中の疲れと心配は全部忘れてしまった。きれいな湖、美しい景色、それに熱心な摩梭人に慰めて貰った。わたしも深く「阿注」と瀘沽湖を愛するようになった。

左所についてすぐには摩梭人の家に住まず、外で生活した。多くの摩梭人の女性が会いに来てくれた。彼女たちは何を言っていたかわからなかったが、誰もが親切で笑顔でいたことは今でも思い出すと涙ぐむほど忘れられない。私は兎年生まれで彼は羊年生まれである。2、3日後、ラマは日を選び私は摩梭人の「王妃」にふさわしい摩梭服を着て「土知府役所」に出向いた。雲南省永寧「土司」「総監」「火頭」（現在の村長にあたる）および、周辺の漢民族と友人たちも大勢来てくれた。その晩、彼らは「土知府」の王妃である私を迎えるため、摩梭鍋庄舞という踊りを踊ってくれた。私もそのすばらしい笛の音に陶醉した。思わず、持ってきたオルガンを弾いて、私の答礼とした。私はこのように「女人国」に踏み込んで徐々に摩梭人の礼儀を身につけて、1年もかからないうちに、摩梭語をはなせるようになり、ついに名実とも本当の摩梭人になった。

残念だったのは私と主人が持ってきた50セットの小学校の教科書で摩梭人の子供に教育させようとしたができなかった。なぜなら、1944年私は妊娠したので、王妃として、夫と家族は心配して無理をしてはいけないということであった。公文書と手紙以外はなにも仕事できなかった。近くに漢語を話す先生がいなくて、西昌へ先生を迎えに行きたくても遠くて、さらに蛮族、盗賊がいるので行かせてくれなかった。また、最初、毎日役所に山のように積み重ねられた公文書や書簡および礼節往来の書簡を処理しなければいけなかったので、秘書である私は大変忙しく、学校を建てることなどはできなかった。

嫁いだばかりのころ、私は瀘沽湖の美しい山水に惹きつけられた。数日後、私は親、兄弟、友達をしみじみ懐かしく思った。山険しく、遠く、森林蒼々として都市の面影は何もない。すべて見知らぬ世界で、あっちこち原始的な丸太の平屋と母系大家族ばかりで、瓦葺きの家は土知府しかなかった。目に入るのは永寧堰、瀘沽湖の湖水、青山、牛羊、穀物、摩梭人と家来たちであった。親や級友を懐かしく思い、寂しくなると私はただ「双鳳」製のオルガンを弾くしかなかった。オルガンの音は島や村中鳴り響いたものである。私の住んでいる島は瀘沽湖の南東部にあって「布瓦瓦」と摩梭人呼んでいた。私が来た後、「王妃島」と呼ばれるようになった。島には私一族三代によって建てられた庭園、望海楼、住居、経堂、焼香台などがあり、非常に雄大壮観であった。家の使用人たちは私がオルガンを弾くのが楽しみで、とくに面白いのは私が弾くと、名も無き鳥がいつも窓の前の木に飛びついて羽を振るい、首を横に振り「尊敬すべき王妃さま、寂しくしないで、私たちはいつもそばにいてあげるから。故郷への便りがあったら送ってあげよう、美しい漢民族のお嬢様！」と喋りかけているようだった。悩んでいる

とき、私は島を出て馬に乗り、狩りに出かけたりした。阿注の指導のもと私は鉄砲の腕が上がって、いろんな銃を使いこなした。私は主人に漢字の読み方や書き方を教える代わりに、銃器の使い方を教えてもらった。彼は頭がいいので漢字を理解するのが速かった。後で漢字は彼が人民のためにする仕事の中で大きな役割を果たした。

1945年、草海で「土知府役所」を建て直したとき、私は二人目の子供を産む直前であった。1947年、建物はまだできなかつたが、彼の妹婿が「病氣」でなくなった。妹婿は生前は前所の「土司」だったので、土司を継ぐことで、木里の「土知府役所」と衝突して戦いとなった。しかし、土知のチベット兵がよく戦ったので、あっという間に左所の役所へ攻めてきたが、供給線が長過ぎたため、役所を攻め落とせず、敗戦となった。最後に木里の活仏によって和解した。

#### 4.2 私の父

私の父親——肖曾元は私の心の中で偉大な軍人で優しい父親だった。小さいとき、父は私をたいそうかわいがって、忙しいときでも暇を見て私と遊んでくれて物語も語ってくれた。幼年時代、私は童話の世界にあるように多彩に過ごした。私が真面目に勉強しないと、父はすぐに李白の鉄の棒を磨いて針にするという物語を話したり、詩人屈原の一生と、端午節にドラゴン・ボート・レースとちまきを食べるとの関係、そして宋の時代の英雄岳飛や清の林則徐について話してくれた。さらに、1840年の国恥であるアヘン戦争と南京条約を忘れるなど、香港は我が国の領土であることを語り、東北の三省と「七七事変」についても話した。父は24軍の軍需部の主任を担当したとき、忙しい仕事のなか私と弟に対して気を使ってくれた。父は半生、劉將軍の副官であり、24軍の財務を運用することが大変上手であった。

その後、母がいうには、当時共産党の赤軍が西昌を通った時、雅安は24軍の駐留地だった。24軍は西昌で勢力を保つため、劉伯承、朱徳、周恩来とひそかにコンタクトをとっていた。中国の共産党が抗日のため北上して、ここを通らせてもらうだけで、中国人同士ではお互いに戦うことをやめようと、赤軍のほうがそう言ったようだ。以前、内江、白貢に居たその劉伯承と母が実際に面会したことがある。彼は赤軍の道を開く先発隊であり、そこで24軍とお互いに戦わなかった。彼の部隊は西昌を通るときたくさんの県が蒋介石の赤軍を止めよという命令を無視して、みな劉軍長の秘密命令を実施し道を譲り、わざと空に銃をぶっぱなした。また逃げる時わざと赤軍に弾丸と火薬や食料を残してやった。瀘定橋の戦いで赤軍は非常に勇ましかった。その年、私たちが橋を通ったとき橋頭の壁に無数の弾痕があり、赤軍が書いた文字があちこちにあった。当時、中央軍と劉湘の部隊が赤軍にたたきのめされた。劉文輝將軍はすばらしい軍官であったが、彼は蒋介石と劉湘にとてものけものにされ、川西の辺境に追いやられた。蒋介石は彼を殲滅したかったのだが及ばなかった。何度も蒋介石に呼ばれたが、彼はいつも副官を

派遣し成都あるいは重慶へ蒋介石に会いに行かせた。1949年、周恩来、朱徳の電報命令に応じて、24軍は雅安、西昌で蜂起して軍隊を完全無欠に人民解放軍に渡して中国の革命と新しい中国に貢献した。解放後、劉文輝は中華人民共和国の農業部の部長に就任したが、1970年北京で病死した。

1945年、父は劉文輝將軍と西昌に視察にきて、夫に会いたいと言ってくれた。年始、私は主人と西昌の彼らがいるところに訪問した。1年間会っていなかったので、父がずいぶん老けたように感じられた。父に会うとき、私は涙がこぼれ、うれしいやら、かなしいやらわからなかった。私は瀘沽湖の山と水、および摩梭人の風土人情を彼らに紹介した。摩梭人の「通い婚」という習慣を話すとき、劉將軍が笑って、「この男は幸福そうだ。喇宝臣をみればわかる。あなたの民族はみな嫁入りと嫁取りはしないのか？ もし時間があつたらぜひ一度瀘沽湖を見てみたい」と言った。父は公務を処理してから劉將軍から1ヵ月の休暇を貰って、私たちと一緒に瀘沽湖に行った。当時、すでに60歳の高齢であり、馬の背で10日過ごしたので着いたら調子が悪くなった。じっとしていられなかったのか、着くと娘婿を助けて事務をこなした。しかし、それが原因で体調を崩してしまった。父が頭が痛いと言うので永寧から医者呼んだが、もう手遅れだと言われた。娘とともに父は永遠に瀘沽湖に残ることになった。

当時、私は、海島山庄に住んでいた。父は「土知府」の役所に滞在していた。彼が亡くなったから、翌日になって私に伝えられた。当時、私は死ぬほどつらく泣ききずれた。父が亡くなった日の悲しみは、それまで私が感じたことのない悲しみであった。村民らは漢民族の葬式で父を丁重に埋葬した。そして、摩梭人のラマ僧を呼んで靈魂を済度した。西昌から紙と線香を買ってきて、7日間読経した。

父の死で私は外部と全く連絡がとれなくなったので母と弟はもともと懐かしく思えた。兄と姉は私が瀘沽湖に来るまえにすでに病死した。父は彼の戦友と一緒に蜂起することができなかったこと、また新中国の成立をも見られなかったことは父にとっては最大の遺憾だと思う。

母は道徳のある人であった。母は優しく親切で人助けが好きの人だった。しかし、父が亡くなった後、気をやんで1949年に亡くなってしまった。それから、弟も病気で亡くなってしまつてこれで私だけ永遠に瀘沽湖に残されることになった。

#### 4.3 私の阿注

主人は喇宝臣といい、結婚した日は彼と初めて知り合った日でもあった。それは1943年旧暦の12月18日である。そのように面識のない人と結婚するのは賛成できないが、当時、女性の運命は親の取り決めで婚姻を決めていた。そんな旧社会の世界で抵抗したくてもできなかった。

彼は背がそれほど高くないが、耳が非常に大きく、1907年羊年生まれである。その年、彼は

36歳で私より20歳年上であった。摩梭人のすべての長所を持った人である。彼は素直、親切、客をもてなし、優しく気配り良く、正直、気丈、頭の回転が速く、漢語も話せるし、藏語も少しできる。後に彼に漢字をも教えてあげた。彼の毛筆書きは進歩が速い。小さいときラマ僧になって、学校には行ったりしたことはないと聞いた。漢人や知識人と知り合いになることが好きで、正義感が強く、弱肉強食を嫌った。強奪し殺人を犯す強盗に対しては、断固とした態度をして彼らから恐れられた。彼の支配範囲の「土知府」において人民は強盗に怯えることはなかった。強盗に対していつも取り締まっていた。別の地区から来た人、または強盗から逃げてきた人をみな保護した。住所を調べ、旅費を渡し、数日後家来の伴いで彼等を家まで送って行く。当時、塩源、寧浪、八二橋、包都、永勝など地方の漢族の人たちが強盗から逃げて助けを求めて来るのはしばしばあった。国民党の下で「土知府」の首領をしていたときでも、また新中国成立した後区長を務めていたときでも瀘沽湖畔の各民族人民のために尽くしていた。

1935年、赤軍が長征で冕寧を通った時、主人はちょうどそこにいた。彼はもらった赤軍の帽につける赤い星を持って帰って、「経会」に保存しておいてまた壁に星をたくさん描いた。残念なことに1958年に「経堂」は取り壊された。当時は少数民族が赤軍を敵として戦わなければ赤軍側から援助してもらえらることになっていた。主人は会議にも参加し赤軍のことはよく知っていた。うちの借地料を納められない貧しい人に対して、管財人に「いいよいいよ」となだめ、また、貧しい人たちに種をあげたりした。無口で何にでも笑って解決しようとしたりしていたが事件を処理するときは果敢であった。彼は山の森林を大切にする。誰かが家を建てる話を聞いたら、森林の管理人を監督しに行かせて切り倒す木の本数と場所を規定していた。毎年主人は転山祭りや転海祭りの責任者で、7月中旬に死者たちのためにラマ僧に誦経してもらって、亡霊を済度した。7月と8月の端境期には部下を使わして貧しい人々に米を施した。そういう人々に、湖へ行って細鱗魚、エビ、菱の実をとって自給するように声をかけた。当時は草海と湖には獲りきれないほど魚とエビがいた。彼は優しく、静かな声で話し、民たちに尊敬されていた。文化大革命中、紅衛兵に左所に連れていかれて批判されたとき、民は彼に味方し、彼を攻撃せず、鶏や羊の料理を食べさせ、紅衛兵に気まずい思いをさせた。

1949年末、主人は劉將軍の命令で解放軍を歓迎し、共産党を支持し、新しい中国の建設に一所懸命働いた。1950年後彼はわずかの家来を仕事の手伝いのため残してもらって多くの家来をみな自分の家に帰らせた。銃器を島に全部集めて、私に管理させた。最初彼は左所区人民政府の区長に任命されて、1953年塩源に転勤した。その後、西昌に転勤し行署民族事務委員会の副主任に就任した。1956年四川省の民族事務委員会参事を担当し、文化大革命の間、西昌と塩源の政治協商委員会に勤めていた。そして、1976年病気でなくなった。

#### 4.4 革命の洗礼

1950年から1954年まで、共産党は少数民族に対して良い政策を行った。土地改革の実行の前に私の家はすでに共産党の呼びかけに応じて「減租減息」を行った。1953年から1954年まで、家庭の生活を維持するために、ただ労働力の多い家庭や多すぎる土地を持った家族と富農だけから借地料を徴収した。1954年からそれもとることをやめた。私たち摩梭人の特別な優点は助け合うことで、一家に困難があるときは村全体で援助する。当時、村民から穀物、肉、牛、羊、魚などをもらったので生活にはそんなに困らなかった。1956年、山賊の反乱があった。当時、私は子供と一緒に島の山庄に住んでいた。新しい役所にも古い役所にも県からの工作隊と政府の役員が住んでいた。私たちはずっと政府と人民と一緒に故郷を守っていた。そのとき、私の家には6本の機関銃と200本の長、短銃があったので、これらの武器は左所地区を山賊の反乱から守るには役に立った。1957年私は銃器を全部登記して人民政府に提出した。同時に祖先伝来のダイヤと夜明珠をはめこんだ2本の金宝刀と2本の銀宝刀、それから一对の金法螺を出した。その金法螺は摩梭「母系」民族に代々伝わる珍宝で、祖先たちが大渡河流域から南方に移動した時代には存在した。上に私たちにもわからない文字が刻み込んであって、吹くと瀘沽湖の周り全部に聞こえ、他の摩梭土司が誰も持っていなかった宝物であった。ほかに黄金、白銀、清朝の康熙帝から下賜された一串の朝珠や一枚の黄銅印章があった。その印章には「左所氏系府逾千戸印」という文字が刻み込んであった。康熙帝49年に下賜されたものである。その後、それらはどこにあるかは分からなくなったが、いずれも摩梭人の大切な宝物である。

私は主人ともに民を愛して金と財産があまりないので、時に総管財人と飯炊に金や穀物を借りた。馬も飼育していなかったので西昌と雅安から馬を租借した。こんな状態でも主人は貧しい人に親切に食糧をあたえつづけた。1954年、海辺に役所を建てるのに3年もかかり、祖先の財産を使い切ってしまった。これは私が仕切った仕事だ。1957年、新しく建てられたばかりの「土知府役所」はそこで「五四」青年節を祝った若者に燃やされてしまった。家族すべての財産を使い切って建てられた雄大な建物に主人は多大の心血を注いだ。プランから設計まですべて彼一人で指揮していた。石工は雲南省の麗江から来てもらい、大工は当地あるいは他の地方の大御所で3年もかかって雄大な建築物ができた。庭園も広大でとてもすばらしかった。残念だったのは、人々がそれを保存してくれなかったことである。このような文化財は一瞬にすっからかんになって、島の山庄も文化大革命中に取り壊されてしまった。

私の一家は共産党を擁護し、共産党が発した政治命令を施行し、左所地区の民を安定させた。中国共産党の指導のもとで主人は率先的に「土知府」の総管財人や飯炊も「減租減息」に積極的に応じた。人々の生活は、1950年よりもますます向上し、心も豊かになった。1953年、富裕の飯炊たちからもらう時もあったが、私の家の生活は主に総管財人のもとで家来たちの手伝いに

よって自給できた。1957年、土地改革のお陰で私たちにも多少の土地が分配された。私は全く肉体労働できず、したこともなく、幼少時からずっと召し使いがいるという寄生生活を30年ぐらい過ごした。1957年と1958年には私たちはすでに自分自身の暮らしが自給できるようになったが、後にできた大食堂で満腹したことはほとんどなかった。そして、地主としてわたしは時々批判された。世の中は善人が多く、阿日（祖母）、阿伍（舅）も私を助け、こっそり食べ物を援助してくれた。当時、長女も次女もとても上手に草海で魚や菱の実をとった。昼は彼女らを学校に送って、平日はわたしも団体労働に参加するようになった。県からの工作隊の人が気に入らなければ、地主である私を批判する。

1959年私は塩源県の警察局に逮捕され、「不法な地主として農民を搾取し賃借料の八百担（約4万キロ）の米を受け取った」という罪で8年懲役の判決をいわれ、労働改造をしなければならぬので、西昌の黄聯関監獄農場に抑留された。

逮捕に来た時、本当に恐怖を感じた。銃殺の恐怖を感じた。まさに「二度と戻れない」という恐怖だった。しかし、自分の家の人は誰も人を殺したこともないし、庶民に対して親切だし、また自分は字が読めるし世間のことはある程度分かっている、と考えてすこし安心した。農場に到着してから、囚人を監視する看守は共産党の政策を教えてくれて、特別扱いしてくれた。批判はされず、看守たちは私の過去を知ってからさらに気にかけて、日用品など分けてくれて生活が自給できるようにいろいろ教えてくれた。看守たちはめったには私に力仕事をさせなかった。まず、医学を学んだが、私は臆病なので患者に注射することができない。針を持つと手が震えるので、統計や保管や生活の管理の仕事をさせてくれた。以前、わたしは管理の仕事をやっていたので自信はあった。当時、私は32歳で元気があり、しっかり仕事をこなし、毎年、上級教官からの評判が良かった。街に買い物に行くときにも、看守の付き添いなく報告のみで済むようになった。私の刑期が終わった時の1967年はちょうど「文化大革命」の最中で、街は紅衛兵で一杯になった。その時、紅衛兵の多くは真実を知らずに、私は国民党のスパイだと疑われてしまった。共産党と人民政府は「文化大革命」の災難を避けるために農場に残った方がいいと勧めてくれた。そして、月、21元5角の給料を払ってくれた。もし、農場を出たら必ず「文化大革命」の災難を受けることになる。これは、私たち摩梭人が毎日線香をたてて、摩梭人の菩薩「背尊独馬」の加護のおかげであろうか。農場から貰った給料は生活費を除いて、残りはすべて子供たちに送っていた。私は農場で14年間生活していた。その間、農場の外に何度も紅兵がきて私を拉致しようとしたが農場のなかには入れてもらえなかったようだ。1957年、1958年に批判されたのを除いて私は無事に過ごすことができた。

1972年林彪が失脚した。私は子供たちのことをすごく心配した。ここ10年は宝臣が面倒を見ていた。情勢がよくなってから、わたしは農場を出ることができた。当時、宝臣は塩源県の政

協で働いていて、彼は県で一緒に生活しようと言ってくれたが、私はやはり子供たちと一緒に暮らしたかった。瀘沽湖は私の第二の故郷で、忘れがたい。そこは山が蒼く、水がきれいでさらに人もよい。帰ってきてから区政府は私に区政府直営の店での仕事を配属してくれた。その仕事を数年やったあとで、家庭請け負い制度が実施される時に私は実家に帰り、家の番を今日までしてきた。

家に帰ってみると、14年前に14、5歳だった娘と息子は自分の子供を持っていた。私も「阿日」（お婆さん）になった。私がか家を離れてから、子供たちは失学した。彼らに会って嬉しいやら、悲しいやら、心が痛かった。彼らはここ14年どう過ごしてきたか、また誰に助けられたかを語った。世間にはまだ善人はいる。摩梭人はお互い助けあう民族で母系大家族はもともと慈善の人々であったので、私たち夫婦がいなくても子供たち四人姉妹は飢餓、寒冷、病気などで死ななかつた。それに民たちが世話をしてくれた。ここで私が亡くなった「阿注」のかわりに、子供4人を救ってくれた方々に、心から感謝の意を表したい。みなさんの御家族は御健勝と御繁栄であるようお祈り申し上げます。

私の幼少時代、少女時代は暖かい家庭生活で花と賛美の声のなかで過ごした。でも私の子供は14、5歳で教育が受けられなくなり、末っ子は学校にも入れなかつた。私は共産党と人民の保護をもらったが子供は辛かつた。彼らが何をしたのだろうか？「林彪」「四人組」は内戦の「文化大革命」のなか、どれだけの罪なき人の命を奪い、国民経済を崩し何十年も遅らせた。人類の不文明と醜悪を歴史の舞台に持ち出し、我が国の50年代60年代に生まれた人の心は虐げられた。これはまさに民族の恥であり、中華人民はきちんと覚えておき、このような事が再び発生しないよう、子孫万代は花と幸福のなかで成長するよう祈念する。

#### 4.5 今日の摩梭人

今の中国を見ると、中国共産党の第11回三中全会以来、改革開放の波は中国全土に及んでいる。「林彪」「四人組」に潰された国民経済は改められ軌道に乗っている。企業の集団化、株式制、合資化などあらわれている。個人経済は順調に発展し、国民の素質も向上し、科学技術は日進月歩で国防の準備も万全で、農業技術も日々向上している。昔の左所においてとうもろこしは1畝（ムー。6.667アール、15分の1ヘクタール＝訳注）あたり、100～150キログラムぐらいだったのが、現在では500キログラム以上とれるようになった。農業組合の生産下請けは農民に幸せをもたらした。交通、公衆衛生は発達し、左所にも中学校ができた。これらは国民党時代に夢にもみなかつたことであつた。

瀘沽湖の自然環境は1958年から70年代にひどく破壊された。現在、政府が整備保護している。例えば、海門橋草海一帯に一度絶滅した蘆が植えられ、鳥類の生息地が確保、保護を受け、

白鳥も戻ってきた。瀘沽湖の排水口にあった低性能の発電所を解体して、細鱗魚は長江水系から自由に往復できるようになった。観光地の生活の污水問題を解決するために無汚染のエネルギーの使用を呼びかけている。例えば、太陽光電気や夏にメタンガスなどを利用したりして、森林伐採を減少させるべきである。もし昔のように、棒で野生の鴨が狩れて、ひしゃくで魚がとれて、黒熊、野猪、野ウサギなどが村を走り、庭にやって来る場面を再現すれば、私の第二の故郷瀘沽湖はもっと美しく、「女人国」の女性はもっと綺麗になるであろう。

1996年、昔のクラスメートに誘われて、成都に行った。今度は1943年に瀘沽湖に来てから初めて雅安と成都に戻った。激しい変化を見て、まるで夢を見ているようであった。この変化は昔想像できなかったものである。特に改革開放後、市場の経済発展と都市生活の変移で各分野で活躍する女性は現代中国の風彩をみせている。もし、わたし、肖というお婆さんが30歳も若くなれば一つ活躍したいものだ。そうするとこの世に生きている価値があると思う。現在の私には力がないので共産党について子供たちの教育に力を入れる。

未来を見渡して、祖国は日々強大になっている。私肖おばあちゃんはやっと香港の返還を見た。百年の恥を一気に洗い、国民が堂々と頭をあげられるようになった。海峡の向こうの同胞たち、同窓生たち、友達よ、帰ってきてみよう。故郷はあなたたちを呼んでいる。美しい瀘沽湖が笑顔であなたたちを待っている。神秘の東方女人国母系大家庭がみなさんの来るのを楽しみにしている。

末代摩梭左所土司王妃次尔直瑪 口述

劉学朝 整理

## 5 著者の言葉

摩梭人の母系大家庭は雲南省寧浪県永寧郷、金沙江流域の寧浪区間、四川省塩源県左所、木里県内の村に散在している。この古い遊牧民族が南の永寧左所の辺りまで移転してからもう三千年以上たつ。

歴史の変遷中、彼らはまだ古い生産、生活方法と特別な民族風情を保っている。たとえハイテクの今日でも、その古い風習が力強く守られているのには全く驚かされる。

都市生活の速いリズム、工業、車の汚染、それから人口の膨張の中、人々はひっそりと静まり返った瀘沽湖へ探検に行きたくなる。観光事業の振興につれて、社会に摩梭人を書いた文章がたくさん出てきて、人々はそれを読んだあと、瀘沽湖へ観光、探検にくる。そこで、観光客の中にはよく失態を演じる人がいる。例えば多くの遊客は「通い婚」を原始の「群婚」制度だと勘違いする。要するに、手をつないだり、踊りを踊ったり、食ったり、飲んだりして、数時

間で、あるいは1日、2日間ぐらい「女人国」にいれば、もう「通い婚」ができると錯覚する。深夜、瀘沽湖のどこかから「お嬢さん、僕を騙した」と喚く観光客がよくいる。こんな事件を私自身でも4、5回処理したことがある。彼らを私の摩梭人案内所へ呼んできて、無料で解説して、それに少しばかりの資料をあげて、他人の睡眠を邪魔しないように説得したりした。摩梭人の風習を理解したのちに、彼らは感謝の気持ちに変わった。そのあともよく私に電話をかけてくれる。そして彼らの友達が瀘沽湖へ来る時私に案内するのを指名した。

通い婚は、心が通じなければならない。経済発展につれて、摩梭人家庭はだんだん小さくなりつつあり、通い婚も相手を限定しつつあるが、全体的にはまだまだ原始の風俗習慣を守っている。もし仲間に入れてもらいたければそれは時間がかかるはずであるが、ひとめぼれされたりしたらそれはまた縁である。もし、君が選ばれたら、それは君は本当に認められた人で、彼女たちは君のことを心の白馬の王子だと思ってくれるだろう。

地元の風俗習慣をあまり知らないよそのものが、瀘沽湖観光地にたくさんの笑い話を残した。私は、摩梭人の村で20年も仕事してきたものとして、また、今も瀘沽湖湖畔に住んで摩梭人と一緒にいるので、正確に人々に彼らの家族構成、生産生活および「通い婚」という風俗習慣を教え、また正確に人々に「女人国」の母系家庭に導き、笑い者にされないように、この小さな本を書いたのである。これは、私が彼らと一緒に生活してきた見聞である。まだまだ、たくさんこの本では述べきれない。みなさんは来てみて、その時に分かるはずである。

「阿夏の通い婚」のことについて、多くの観光客が誤解している。摩梭人の村を原始の群婚部落と見ており、「阿夏通い婚」が決まったルールや礼儀がなく、どんな場所、どんな条件でも、異性と性愛をしてもいいと見ているようである。血縁も、目上目下もなくすべては動物の性行為のようだという誤解がある。このような認識と考え方は、大きな間違いのもとであり、そしてこのような見方に対しては摩梭人の最も反感を覚えるところである。摩梭人と一緒に生活した20年あまりの間に、私は彼女（彼）の「阿夏通い婚」と「阿注定住婚」について、深く、つぶさに観察してきた。彼らの通い婚は、一定の感情を基礎にしてはじめて可能である。社会の影響と、生産力の発展につれて、一部の風俗習慣が変わったに過ぎない。観光客のこのような誤解は、主に摩梭人の社会歴史と生活習慣について無勉強のせいであり、うわさを信じたせいである。

瀘沽湖の伝説について、三通りの異なった言い方がある。それはいずれも近年来一部の学者が民間伝説を聞いてある程度の文学的加筆を加えたものである。民間伝説をこの地の実情と一致させるために、私は多くの年寄りの意見を求め、書いてから彼女（彼）たちに読んできかせたりした。彼らは「このような書き方はいきさつがはっきりしており、またこの地の人情にもなっている。神様は菩薩が派遣したのである。菩薩がいなかったら、神様はいない。このよ

うな書きかたがいい。よく私たち摩梭人を宣伝してくれた。それらのトンチンカンな話に対して、私たちは読み書きができないので、お客様にははっきりと説明できない」と言ってくれた。私はガイドをする時、これらの伝説を観光客に語った。観光客はそれを聞いてよるこんで、一部の人たちは「格姆女神山」にも登った。

落水と獅子山（格姆女神山）は摩梭人の言葉では「<sup>コム</sup>格姆」と呼ばれ、チベット民族の言葉では「<sup>センコ</sup>森格格姆」と呼ばれている。「センコ」の意味はライオンで、「コム」の意味は白の女神である。麗江納西族には「<sup>カキム</sup>可門古」と呼ばれている。一番最初に聞いたのは父が1960年代に言ったもので大きな魚から形成したのだと、そして、落水、丸太の家、猪槽船と獅子山は摩梭クニヤンから変身したのだと、それだけ。

1972年、食料局の局長の羅祥さんと一緒に永寧入りした時、私はまだ16歳だった。楊打史（摩梭人の方）の案内で私たちは馬車で出発した。狗鈎洞の南側の曲り角を回ったところで道端に大木が横たわって、道を遮断した。それはまるで私たちの足を留めるようであった。そして大木は「私はすぐこの世界と別れるのだ。私を見て下さい。私の友達は明日にでも私と同様の運命に遭うかもしれない。あなたたち人間はもうこんなことをしないで。今日あなたたちの進む道を遮って本当にすまない。私を切り倒して下さい」と訴えるように私たちに言っているようであった。三人では無理なので、一番小さい私が、3キロメートルぐらい離れた雁洞村まで戻って、村人に頼んで木を切り倒してもらうしかない。その時は車が通らず、県政府でさえ1台の車もなかった。道路の両側には木がよく茂っている原始の森である。私は大変怖いので、打史は自分の刀を渡してくれた。羅さんは、「今時は山賊はいないので、怖がらなくていい。はやく行ってこい」と私に言った。打史も私にこう言った。「もし黒熊に出会ったら、絶対走って逃げないように。地に伏せて死んだふりをしなさい。もし向かってきたらそいつの要所である鼻を思いきって斬れ！ そうなれば、私たち三人は熊の肉を御馳走になれるよ」。打史はまたこう、こうと手本を示してくれた。羅さんはワハハッと大笑いをした。私が村から人を呼んで来た時、彼らはテントを張っておいていた。その大木を2時間でやっと切りたおし、道を疎通させた。その晩、私たちはそこで一夜を過ごした。私は初めて原始林で一夜を過ごした。その夜、打史は獅子山の物語や落水の来歴を話してくれた。父の言ったのと大体同じだった。彼らは話しながらお酒を飲んだ。羅さんと打史はお酒に強い。彼らは私にもお酒をすすめた。私は中学校を卒業して仕事についても今まで飲んだことがなかったし、味も分からないので飲みたくなかった。ところで打史は話すのを止めてしまった。羅さんはこう言ってくれた。君が一口飲んだら、私たちは山賊をやっつけた話をしてあげよう。今、お酒を少し飲めるようにしたら、将来通い婚をして、摩梭人のお嬢さんになるならまずお酒が飲めた方がいい。明日私たちは摩梭人の家を訪問することになっているよ。さあ、どうする。それを聞いて私は一口飲んでみたが、

からくて涙が出て来たのに、二人は笑いこけていた。しばらくして、彼らは私に永寧の摩梭人の娘さんが神様になる話や獅子山や落水の物語、そして山賊をやっつけた話をしてくれた。

翌日、私たちは落水についた。羅さんは私にお土産を背負わせ、三人で落水下村を訪問した。当時はまだまだ原始的だったので、私たちが着いたら、阿米は黄酒を持ってきた。これは「酥里馬」と呼ばれている酒であった。羅さんに教えてもらいながら私は少し飲んでみた。これは昨日飲んだやつよりおいしかった。阿米と娘さんは私をちらっと見て摩梭語で打史にこう言った。「この漢族の子はかしこいね」。打史は漢語で彼女たちに昨日、私がお酒を一口飲んだため、彼らに一晩中物語を語らせたことを話した。その中で私に彼が16、7歳頃、通い婚した風流話を披露した。それを聞いて私たちは腹を抱えて笑っていた。その後、私は瀘沽湖の辺りへ遊びに行った。当時は人民公社の生産隊の時代であったので、摩梭人の社員たちは網を張って魚をとっている。大きな網が岸まで引かれると、たくさんの魚がとれたので、2隻の猪槽船も満杯になった。この「猪槽船」という船は一本の木で作られている。次の日、阿米と娘さんの二人は生産隊に休暇をとって、私たちを「黒娃俄島」まで送ってくれた。その日の昼は私たちは魚を煮て食べ、本当に楽しかった。羅さんはこう言ってくれた。私は50年代頃に来てから今まで一度も島にあがったことがない。文化大革命の前、県長職で忙しかったし、文革中は毎日つるし上げにされていた。今回は君をこんなすばらしいところへ送ってきたついでに、一緒に楽しく遊ぼう。もしかしたら、今回は最初で最後かも知れない。案の定、1973年彼は大理州へ転勤し、のちに祥雲県の書記になった。1984年、私は昆明へ出張に行った時にたずねていった。その後、彼は病気で亡くなったそうだ。

私たちは落水米店で帳簿と在庫を調べて、仕事の状況と農村での食糧の供給状況を調べた。3日目、永寧食糧所へ行って、そこでの仕事が終わってから私たちは獅子山の麓に住んでいる打史の家を訪問した。その晩、落水と同じような心のこもった招待を受けた。日が暮れた後、打史は何もいわずどこかへ行ってしまった。私はどうしたかなと羅さんに打史の行方を聞いたが、実は……と羅さんはこっそりと打史が通い婚に行ったと話してくれた。

私はこうして永寧、拉伯、落水で11年過ごした。1983年、私は県の食糧局に転勤になったが、毎年1、2回は永寧に行っていた。去年、私はまたも永寧に帰ってきたわけである。

四川塩源左所の摩梭人土司次尔直馬「王妃」については、私が何回もお客様をつれて一緒に彼女を訪問したので、私はもう彼女の家族の一員になったようだ。今年の6月、「瀘沽湖の伝説」を書き終わってから、彼女に教示してもらいに行ったとき、彼女は読んだ後、もうちょっと摩梭らしく、獅子山や瀘沽湖を首尾の良い物語に書いてくれと言って下さった。私は何度も彼女の経歴を聞いたが、聞くたびにすこし違うし、いつも何かを忘れてりするるので、私の提案のもとで、彼女が口述し私はメモして、整理した後、彼女に読んで聞かせて、忘れたことを再

び書き直し、まるまる10日間でやっと原稿を書き上げた。

この本を書く過程の中、大勢の摩梭人の同窓、大先輩および普米族の友人の御支持と御援助がありました。李保山、和林慶、和甲初、朱軍、楊雄文、陳新、胡鏡明、郭学文、曹建忠などの方々。そして、四川塩源左所区區長（摩梭人）の老唎、病院院長の羅医師にもいろいろと御世話になり、ここで深く感謝の意を表します。

最後に、この本を刊行するにあたって、御尽力いただいた雲南民族出版社の納文彙先生と張東平さんにも厚く御礼申し上げます。先生の真剣な態度と、他人のために自らよるこんでひたむきに奉仕する精神は尊敬すべきです。先生に御協力いただいたからこそ、この本は刊行されることができました。

作 者

1998年7月8日

## 6 忘れがたい瀘沽湖

納文彙先生と原稿を審査してから、2件確認事項があるので瀘沽湖へ行くことになった。一つは原稿の写真の質が悪いから、撮り直さなければならない。もう一つは肖淑明おばさんに関する事で本人に確かめる必要がある。それで、車を借り、カメラマンの海君を誘って賓川を経て寧浪へと急いだ。残念ながら、作者の劉学朝さんは入院中なので、奥さんの馮さんに私たちを瀘沽湖へ案内してもらった。

冬の寒い風とほこりが舞い上がる山間を車がひたすら走った。瀘沽湖を目の前にした時、私たちは思わず歓喜の声をあげた。おお、何と美しい瀘沽湖でしょう。湖の水が青々と輝いていて、はかり知れぬ高貴な雰囲気秘めて、まるでサファイアのようなと言っても過言ではない。夜は波が岸に打ち寄せる音に耳を傾けながら眠りに入り、朝起きてから、幾百幾千もの鴨が鳴きながらこっちを見ている、なんと美しい眺めでしょう。道理で海君は何回瀘沽湖に来ても全く興味を失わないわけだ。

瀘沽湖は美しい、瀘沽湖湖畔の摩梭人の純朴な風習はもっと感心させられる。いつでもどこでも、摩梭人の家を訪れば、相変わずの厚い招待を受ける。ある日、永寧で撮影が終わった後、もう日が暮れていた。ある摩梭人の家に入ったら、病気の母親が、菓を煎じていて、私たちを見ると笑顔になり、私たちを席に案内してすぐ酥油茶を入れて下さり、茶の中に卵を入れてくれて、たちまちいい匂いがぶんぶんした。私たちはそれを飲むと疲れが飛んでいった。この母親は腸づめと塩づけの豚の足をとりだして御馳走を作ろうとしたが、どうしても行かなければならないので、何度も断ってやっと分かってもらった。帰る前に私たちが持ってきた果

物を全部彼女に差しあげた。

肖おばあさんは少将師団長の娘である。高卒で、見聞が広く物事に明るいお嬢様であった。現在は左所に定住している。落水から左所までわずかに20キロであるが、道路は不思議に悪い。時々、どこが道かどこが水路かもわからない。凸凹で、車で通るにはまず車を降りなければ通れない。こうして3時間してやっと左所についた。肖おばあさんと会った時、来る時の苦労はどこへやら吹っ飛んだ。肖おばあさんの晩年の生活はあまりよくない。家が古く、いろりの上にかけてある豚肉も多くない。肖おばあさんは黒の漢民族の服を着ていて、標準的な四川語で話し、振る舞いも淑やかである。摩梭人の村の中でこんな綺麗な四川語が聞けてなんとも気持ちが良い。いくたびかせの年月を経て、肖おばあさんは頂上からどん底まで落ちて、今の生活水準は多分一般家庭のレベルにも及ばない。昔のお嬢様時代とは想像もつかない落差があった。肖おばあさんは、次のような言葉で自分の一生を振り返った。

「あのころは赤の服、白いスカート、  
両側に銃をさして颯爽と馬に乗る。

今は白髪の一老人、寂しい晩年を過ごす。

私は瀘沽湖でもう55年過ごした。自分の一生を瀘沽湖に捧げ、民族団結の促進に尽した」  
肖おばあさんから時代の移り変わりと発展を見ることができた。

このほか、私たちは多くの他民族の人が「通い婚」で摩梭人の家庭に入ったことに気付いた。その中には、なんと省都昆明から来た男性一人と女性一人もいた。たぶん摩梭人の善良、素朴、広い度量を慕って来たのでしょう。

最後に馮さんには大変お世話になり、心から感謝いたします。

何度も原稿を手直しして、やっと出版されましたこと、本当におめでとうございます。

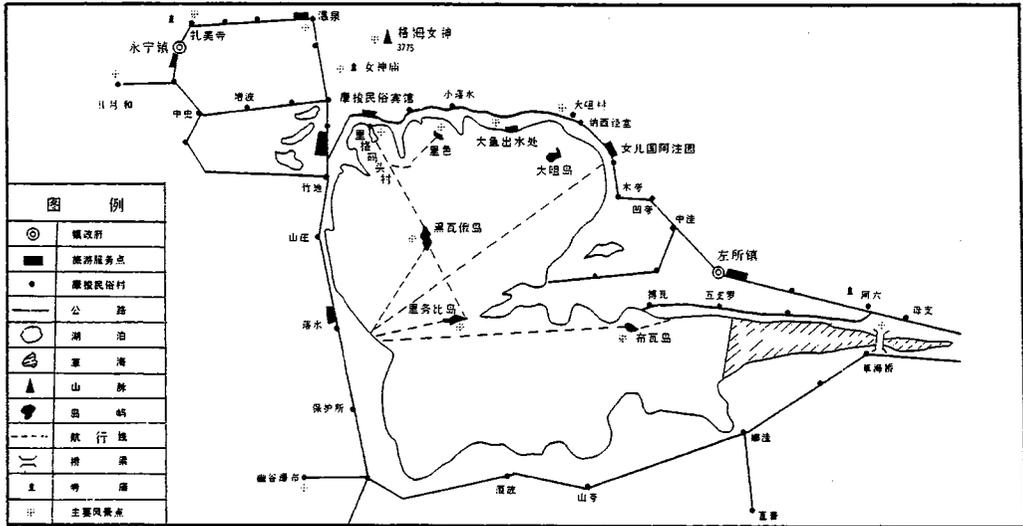
張東平

1999年1月20日 昆明にて

## 注

- 1) この翻訳は、劉学朝編著『走進神秘的東方女人国』（雲南民族出版社、1999年2月）より2000年1月31日訳出し、訳者のホームページ（<http://www/aichi-gakuin.ac.jp/~toddle/01nvrenguo.html>）に載せたものに手を加えたものである。

瀘沽湖観光遊覧図



出所：『走進神秘的東方女人国』より



末代摩梭土司 | 静かな晩年を  
「王妃」肖淑明さん | おくる肖さん

肖さんの一家

(写真はいずれも『走進神秘的東方女人国』より)